ROSEリポジトリいばらき　（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	地政学に関する覚書--地政学概念の変遷をめぐって
Author(s)	高木. 彰彦
Citation	茨城大学教養部紀要(25): 395-407
Issue Date	1993
URL	http://hdl.handle.net/10109/9946
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館）　情報支援係
http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html

地政学に関する覚書

―地政学概念の変遷をめぐって―

高　木　彰　彦

1.　はじめに
2.　事典にみる地政学の内容
3.　わが国における戦前の地政学概念
4.　最近の英米諸国における地政学geopolitics
5.　おわりに

1.　はじめに

1980年前後の国際的緊張の高まりの時期以来，地政学の流行が言われて久しい。旧ソ連におけるゴルバチョフ政権の成立以後，緊張は緩和されたが，ソ連及び東欧諸国での社会主義政権の崩壊による新たな独立国の誕生等，国際政治は逆にきわめて変動的な時代に突入することになった。したがって，国際関係に関する関心は益々高まり，地政学という言葉は依然として流行し続けているように思われる。こうした地政学の新たな展開については，すでに竹内（1987）において詳細に検討されており，筆者もまた拙稿（1991）において，世界システム論的政治地理学との関連で紹介した。

ここまで述べてきた地政学というのは英語圏諸国のそれであり，geopoliticsの訳語としての地政学である。後述するように，地政学は国家の外交政策や対外政策と深く関わっており[1]，国家が存在すると同じだけそれぞれの地政学も存在する[2]。したがって，英語圏のgeopolitics一つとってみても国によって意味が異なるであろうし，ましてやドイツ語のGeopolitikや日本語の地政学とはその意味するものの相違は大きい。周知のように，わが国の地政学はドイツ語のGeopolitikを訳したものであり，原語のGeopolitikは今世紀初頭，スウェーデンの政治学者ルドルフ・チェレーンRudorf Kjellenによって提唱され，その後ドイツのカール・ハウスホーファーKarl Haushoferによって華々しく展開されて日本に導入されたのである。したがって，最近の地政学と戦前の地政学とはその意味するものがかなり異なっているはずにもかかわらず，「地政学」という同一の用語が使われ続けている。そしてその中身の変化に対する学問的検討が不問にされたまま，地政学という用語が次第にポピュラーなものになってきている。他方，地政学という用語が「学」を付与されているにもかかわらず，わが国の大学において地政学を研究する講座なり教室なりが果たして存在するのであろうか[3]。たとえば，ある国の対外政策を述べる際に空間的な位置や地理的条件を問題に

してgeopoliticalという語を用いる場合，ほとんどが地政学的と訳される。同様にgeographicalを訳す場合には，地理的と訳される場合が多く，学は付されない。このように，地政学は一方で「疑似学問」として学問としての価値を否定されながらも，現実の用法においては「学」が付される変わった言葉である。さらに，ウォーラーステインの近著『ポスト・アメリカ』でgeocultureなる概念が「地政文化」なる奇妙な語に訳されるとき，「地政学とは何か」を考えざるをえない。

地政学に関連したこうした用語の混乱を見るにつけ，筆者は以前から交通整理の必要性を感じていた。これが本稿執筆の動機である。とはいえ，英語圏のgeopolitics，ドイツのGeopolitik，わが国の地政学に関する膨大な文献を短時間のうちに辿ることは不可能であり，本稿では地政学概念の変遷を概観するにとどめ，今後の研究の課題を指摘することを目的としたい。

地理学においては，第二次世界大戦中における関わりから，地政学は長い間タブー視されてきた。こうした状況は敗戦後半世紀近い年月が経過した今も基本的には変化していないように思われる。とはいえ，地政学の評価に関する研究は散発的ではあるがこれまでにもなされている。1970年代以降に限ってみても，地政学の評価に関する研究としては，竹内啓一氏によるものがいくつかあり（竹内　1974，1987など），その他に水岡（1974），福嶋（1991）などを指摘することができる。したがって，これまでの研究に新たな知見を加えるという点からすれば，本稿のような覚え書きの必要性はないであろう。にもかかわらず，あえて小論を執筆しようとするのは，ひとえに筆者自身の地政学に対する認識を深めるための作業の前提にしたいからである。したがって，ここでは先行研究に基づきつつ，そこに紹介されているいくつかの文献を筆者自身が辿りながら，地政学の概念を整理してみたい。そうして初めて今後の本格的地政学研究の課題を浮かび上がらせることが可能になると思われる。

ここでは，主として竹内（1974）及び竹内（1987）を参照しつつ検討してみたい。前者は戦前の地政学に関して，「事実の確定と前提作業を目的としたもの」であり，後者は，最近のゲオポリティク[4]の流行現象について，「現代の多様で，対立する諸ゲオポリティクにどのような統一的定義を与えることができるのか，諸ゲオポリティクの間の連接，乃至対立関係のメカニズムは何か」及びこうした復活した「ゲオポリティクと政治地理学との関係」の方法論的・学説史的整理と今後の展望を試みようとしたものである。

とはいえ，筆者の力量からしてとうてい両論文の研究レベルを越えるようなものは書けないし，そこで検討されている文献のすべてを筆者自身が再評価することも短時間のうちには不可能なことである。また，戦前の地政学関係の文献は膨大な量にのぼり，前提作業としてすべてにあたることも不可能である。そこで，戦前の文献に関しては竹内（1974）で検討されているいくつかの文献を恣意的に選び出して本稿での検討の対象としたい。具体的には，飯本（1928），飯本（1929）及び小牧（1940）を対象とする。その前に，現在のわが国における，アカデミックなレベルではなく一般的な意味において地政学がどのような意味で把握されているのかを，事典類に依拠して概観してみたい。また，最近の地政学geopoliticsの状況については，もっぱらテイラー（1991）と拙稿（1991）に従うことにする。

なお，以下においては，便宜上，わが国の地政学に関しては地政学の語を用い，英語圏のそれをgeopoliticsないしは地政学geopolitics，ドイツのそれをGeopolitikないしは地政学Geopolitikとして区別したい。

2. 事典にみる地政学の内容

(1) わが国の場合

平凡社の『世界大百科事典』によれば，地政学geopoliticsとは，「地理的諸条件を基軸におき，一国の政治的発展や膨張を合理化する国家戦略論」であるとされ，その起源をチェレーンに求めているが，内容的にはさらにラッツェルRatzelの政治地理学に遡ることができるとしている。こうした地政学はハウスホーファーによって発展させられ，やがてナチス・ドイツのイデオロギー的基礎となったと記されている。一方，これとは別の系譜として，マッキンダーMackinderやマハンMahanなどによる英米両国における地政学についても述べられている。これに対して，小学館の『大日本百科事典　ジャポニカ』では，地政学の起源をチェレーンに求め，「ゲルマン的国家有機体説と地理的決定論の混血で政治的色彩の強いもの」との説明があり，「ナチス＝ドイツにおいて，ハウスホーファーらによってさらに発展させられ，侵略政策正当化の御用学問としての悪名高いものとなった。」と述べられる。また，「政治地理学の代用として使われる場合もある。」との記述もある。これらの記述はいずれも国際政治学者によるものである。

次に，地理学界における地政学の定義について，地理学事典から引用してみる。大明堂の『最新地理学事典』では，「20世紀初頭に起った，政治現象と国家領土の関係を扱う研究領域」とされ，「国家は単に法制的な力の主体ではなく，社会経済体的な共同体で土地を不可欠な構成要素とする有機体であると考える」と概念規定する。そして，やはりその起源をチェレーンに求め，それを継承発展させたハウスホーファーがナチス・ドイツの政策に利用され，わが国でも第2次大戦中隆盛となったことが記されている。

一方，二宮書店の『地理学事典－増補版－』では，スウェーデンのチェレーンがその著『生活体としての国家』のなかで国家を国土的側面から解明する部分に造語した学問体系の名称」であり，「ラッツェルの『国家有機体論』に傾倒し，彼の政治学理念にそれを援用して政治学体系下にこれを構成した」ものと述べられている。さらに，後にハウスホーファーにより発展させられたが，ナチス・ドイツに利用されたことが記されている。

このように見てくると，地理学においては，地政学とは，「チェレーンがラッツェルの政治地理学を踏襲して創始し，後にハウスホーファーにより発展させられたが，ナチス・ドイツにより利用された。一方，わが国でも第二次大戦中にさかんとなったが，敗戦とともに消滅した」ものとして理解されている。つまり，地政学とはGeopolitikに他ならない。これに対し，一般の事典では，基本的には同様な認識がなされているものの，英米諸国の地政学geopoliticsにも触れられており，地理学におけるよりも幅広い解釈がなされているといえよう。

(2) 英米諸国の場合

これに対して英語圏諸国ではどうであろうか。便宜的に地理学事典に限定し，比較的新しいものをいくつか取り上げて検討してみよう。まず，Edward Arnold社の*A modern dictionary of geography*では，geopoliticsの項にわずか10行の記載しかなく，「国家間の地理的関係を強調する用語で，政治地理学の別の言い方」と定義され，他にはナチズムとの結びつきが記されている。

次に，Facts On File社の*The facts on file dictionary of human geography*でも同様に，チェ

レーンによって始められ，ハウスホーファーによって展開された，いわゆるGeopolitikの内容についてもう少し詳しく記されている。また，Greenwood Press社の*Dictionary of concepts in human geography*では，geopoliticsを「さまざまな地理的要因の影響と政治パターンの地域的側面によって，国家の政治行動を説明し予測しようとする，政治地理学の一つのアプローチ」，「ナチス・ドイツにおいて発達した疑似科学」という2種類の定義が紹介された後，geopolitics（具体的にはGeopolitik）の誕生から発展について述べられている。さらにBasil Blackwell社の*The dictionary of human geography*（初版）では，「空間における地理的有機体ないしは現象としての国家に関する研究」と定義され，ドイツ第三帝国の拡大政策との関わりやラッツェルからチェレーンさらにはハウスホーファーに至る変遷が述べられる点では他の辞書と同様である。ただ，相違点は同様な考えとしてマッキンダーのそれを述べている点であろう。

以上の4種類の辞書では，いずれもgeopoliticsをほぼGeopolitikと同義とみなし，ドイツの状況を中心に解説がなされている。全体的なトーンは地政学に対して否定的なものである。したがって，英語圏の辞書においても地政学に対するイメージは日本の地理学辞典のそれとそれほど異なるものではないことがわかる。

これに対して，*The dictionary of human geography*（第2版）では，その記述が全く異なっている。すなわち，geopoliticsとは別にGeopolitikの項目が新たに加えられているのである。geopoliticsの定義では，「国際関係の構成を理解するのに空間が重要だとみなす，古くからある地理学的な研究領域」とされ，「現在用いる場合にはGeopolitikと混同してはならない」とまで記されている。geopoliticsの経緯についても，その起源をマッキンダーやマハンに求めている。さらに，冷戦の激化に伴ってgeopoliticsが近年復活したとの記述がなされ，そうした新しいgeopoliticsの三つのアプローチが解説されている。それらは，①勢力関係のアプローチ，②国家イデオロギーの正当化に関するアプローチ，③政治経済学的アプローチ，の三つである。この項目はグラハム・スミスGraham Smithによって執筆されているが，一見してテイラー（1991）の地政学geopoliticsの記述と内容がよく似ていることに気づく。こうした新しいgeopoliticsについては拙稿（1991）で述べたように，少なくとも英語圏諸国の政治地理学者にとっては共通の認識となっているようである。80年代の政治地理学のみならずイギリス地理学界で精力的な研究活動を進めてきたJohnstonがこの辞書の編者であることからも，こうした政治地理学界での地政学に対する認識の変化がこの辞書の内容の変化としてすぐに現れてきているように思われる。

とはいえ，こうしたgeopoliticsの新しい理解が政治地理学界だけでなく，英語圏の地理学界全体に浸透しているとは必ずしも言い切れないであろう。他の辞書におけるgeopoliticsの認識は依然として従来のままだからである。拙稿（1991）でも指摘したように，世界システム論の影響もあって，近年の英語圏の政治地理学は国際問題への関わりを急速に深めてきた。そうした努力の現れがgeopoliticsの再認識へとつながるのだが，これについては4.で述べることにする。

3. わが国における戦前の地政学概念

竹内（1974）では，まずドイツをはじめとする諸外国におけるゲオポリティクの展開とそれに対する評価を概観した後，わが国における地政学は1920年代にドイツのGeopolitikの紹介という形で

わが国の学界に導入され，これに対してはその評価と限界性をめぐって「正当な批判が加えられた」と述べる。ついで，日中戦争が本格化し急速に軍事色が強まっていく1930年代後半以降，わが国のゲオポリティクは本格的な展開をとげるが，そうした展開はいわゆる京都学派による「日本地政学」と，東京の経済地理学者を中心とした科学としての地政学に大別される[5]，と述べている。そこで，本章では，わが国に地政学が導入された時期の文献として飯本（1928，1929）を，「日本地政学」派のものとして小牧（1940）を取り上げ，戦時下に刊行された雑誌『地政学』にも触れながら，それぞれを検討してみたい。

(1) 飯本信之の「所謂地政学の概念」と『政治地理学』[6]

1928年に地理学評論に掲載された「所謂地政学の概念」では，飯本は，ドイツで起った新しい学問である「地政学」[7]を「活きた学問」として位置づけ，以後の研究の活性化を希望している。そのためには，まずこの新しい学問を紹介する必要があるとして，地政学の沿革，その基礎概念としての国家観，地政学の本質，地政学の内容と限界，及び地政学の方法について述べている。

まず，起源としては，スウェーデンの政治学者キェルレンKjellen[8]によってラッツェルの政治地理学を応用した，国家の地理的要素を強調する学問として地政学Geopolitikが唱えられたこと，それがドイツに逆輸入されてハウスホーファーらによって活発に研究が展開されていることが述べられる。ついで，地政学Geopolitikがラッツェルの国家有機体説を発展させて，統一的生活体としての国家観を有するものであると述べられる。さらに，「(自然的）生活空間に於ける政治的生活体を其の地的羈束性と歴史的運動による制限との点から理解せんとする科学」という，ハウスホーファーによる地政学の定義を全面的に支持している。

ここで，政治地理学との関連性が問題となるが，この点に関してもハウスホーファーを引用して，地政学を「地理学と歴史学及び政治学の三科学が一点に会する」部分を扱う学問として位置づける。つまり，地理学と政治学との境界に政治地理学があり，歴史学と政治学との間には政治史があり，地理学と歴史学との間には歴史地理学があるのであり，これら三つの学問領域の交錯する点に地政学が存在するのである。このようにして両者の位置づけはなされるものの，飯本は政治地理学と地政学とは「断たんとしても断つことの出来ない宿命的な緒によって結ばれている」と述べている。

政治地理学と地政学との相違については，翌年刊行された『政治地理学』の第4章第2節「政治地理学と地政学」において詳しく述べられているので，同書から引用しよう。それによれば，政治地理学とは，「自然景域[9]と文化景域とに関する国家の依存性即ち国家の地的羈束性及び相互作用に関する学問」（p.31）であり，「国家の地理的実体及び形体の学問である」。「その観察方法は静的であり，その主たる着眼点は国家的存在の形態であって成生ではない」という。これに対して，地政学に関しては，チェレーンによる「地理的有機体即ち空間に於ける現象としての国家に関する学問」や，ハウスホーファーによる上述の定義を踏まえて，「政治的事件の地的羈束性の学問」とするのが最もよいとしている。したがって，政治地理学が静的であるのに対して地政学は動的な性格を持つのである。

さらに飯本（1928）では，地政学は「地的観点より国家行動に関する存在（Sein），必然（Müssen）の研究に基づく総合的理論より，更に当為（Sollen）の国家を眺め，現実具体の国家行

動の合理性，非合理性の価値判断に及び，以て国家の合理的な合目的々な政策の樹立に貢献せねばならない」と，その実践性が強調されている。

以上のように，この時期は地政学の導入期にあたるため，地政学の概念規定及びその評価，さらには政治地理学との区別等アカデミックな内容となっており，後述するような，皇道精神に則って日本の拡大政策をいたずらに高揚するような性格づけはまだなされていない。

(2) 小牧實繁の『日本地政学宣言』

『日本地政学宣言』は，小牧による地政学に関するいくつかのエッセイをまとめて，1940年10月に発行されたものである。同書には15のエッセイが収録されている。同書の来歴については，最後の章である「修学院雑記－この書の来歴」に自身の生い立ちを語りながら述べられている。それによれば，「高等学校に入学した頃から，私は本心，氏神や祖霊を拝むようになった」（p.181）とか，「私は，私の此の性質，此の性能を何か国家有用のことに捧げ，以て皇道開顕，天業恢弘の聖業に翼賛し奉るべく決意をしているのである」（p.210）など，戦前の教育に馴染みのない筆者にとっては，宗教団体の教えのような響きをもって伝わり，あたかもこうした書物を書くことが天命であるかのように感じられる。

同書に収録されているエッセイの中で最初に「日本地政学」なる語が登場するのは，1938年11月に学生新聞に書かれた「地理学に志す人へ－若き人たちへの期待」で，そこでは，既成の地理学に替わるものとしての「新たなる日本地理学から発展すべき，新たなる日本地政学が，歴史的伝統的なる日本精神と共に，吾が国策の基礎でなければならない」（p.17）ことが主張されている。ここでは「新日本地理学」及び「新日本地政学」に関する定義はなされていないが，別の章の「日本当来の地理学－同志の言葉」及び「地理学より地政学へ－日本地政学の主張」で詳しく述べられている。それによれば，新日本地理学とは「新秩序の日本的世界観」に基づくもので，具体的には皇道の精神に即した，八紘一宇の理想実現を図るものである。そのためには，ドイツ地政学に則った「地政学的動的地理学」が志向されねばならなくなり，「日本地政学」の主張へとつながっていくのである。小牧によれば，日本地政学とは，「独逸的地政学の亜流たる如きものであるのではなく，又英国的謀略地政学の如きものでも勿論なく，又旧き支那的地政学の如きものでもなく，実に吾が無始無終の皇道と共に本来日本にありし所のもの，而して今後皇道の開顕と共に，これ等凡てのものを超えつつ，生成発展すべき日本的創造の学」（p.79）と定義される。

竹内（1974）は，こうした「日本地政学」の展開が，①「日本文化の伝統の中にゲオポリティクの伝統を発見していくという仕事」，②「皇道主義」に基づく「日本精神の強調」，③「欧米の東亜における謀略史」を説くことによる，ゲオポリティクの実践，という三つの側面を有していたと述べている。筆者もこうした意見に対して異論はない。

したがって，「日本地政学」はGeopolitikと日本的国粋主義を結び付けたきわめて精神運動的側面の強いものであって，およそ学問と呼べるようなものではなく，文中に「科学的」という用語が頻繁に登場するものの，それは単に科学的成果の積極的利用というような意味で用いられているに過ぎず，分析そのものに科学的装いをこらしたものではない。ドイツのGeopolitikのような実践的政策科学ではなく，単なる精神運動なのである。

ここで，今後の課題として問題となるのは，こうした「日本地政学」の国策迎合的な発言が，当

時のわが国の対外侵略政策にいかに寄与したかということである。八紘一宇の精神に基づく大東亜新秩序の建設が国策として詠われる，近衛内閣の「基本国策要綱」が決定されるのは，1940年の7月である。小牧の著書が出版されるのは同年の10月だが，収録されたエッセイのいくつかはそれ以前に活字になっているのである。また，この「基本国策要綱」決定後，外相松岡洋右によって「大東亜共栄圏」構想が語られるが，この「大東亜共栄圏」構想には，ラッツェルの生存圏Lebensraum概念が影響したとの指摘もある[10]。こうした指摘が妥当だとすると，生存圏概念がどのような経緯で「大東亜共栄圏」構想につながっていったのか。そこに当時の地理学及び地理学者がどのように関わったのか，こうした疑問が今後の大きな課題となってくる。

(3) 『地政学』の刊行と地理学者

1941年11月10日，日本地政学協会が創立された。その機関誌として翌年1月から刊行が始まった雑誌『地政学』の創刊号に「宣誓」文が掲載されている。それをそのまま引用すると，「われら職分奉公の誠をいたし科学性を具有する日本地政学の育成に務め創意と能力とを最高度に発現し以て皇国の理念及びその体制に結集すべき国防科学的体系の樹立に寄与せんことを誓う」とある。また，「日本地政学協会の使命について」においても，国防国家の建設のために貢献することがうたわれており，この雑誌が国防体制のもとで権力側によって意図的に組織されたことが明らかである。こうした組織と地理学者との関わりがどのようなものであったのかを明らかにすることは今後の大きな課題である。この『地政学』には，上述した「日本地政学」グループはほとんど関わっていない。関わっていたのは，飯本や江沢譲爾のような，関東の政治地理学者や経済地理学者である。竹内（1974）によれば，こうした地理学者たちは，最終的に体制迎合的となったにしろそうでないにしろ，学問としてのゲオポリティクに対してはきわめて批判的であったという。とくに江沢の場合，自然地理学的基礎をもつ経済地理学ではなく，「『空間編成』の理論を求め」て，「生活空間を動態的に把握するものとしてゲオポリティクを理解」しようとしたものであったという。この点に関しては，福嶋（1991）が，同様に江沢の地政学を取り上げ，上述の竹内の見解をさらに詳しく検討している。そこでは，江沢が，自然地理学に基礎を置く当時の経済地理学を，新カント派哲学に依拠することによって克服しようと試みたこと，さらにその延長として地政学へ傾倒していったことが主張される。このように，地政学のもつダイナミズムが当時の静態的な地理学を克服するものとして期待されていたともいえるのである。

(4) 戦前の地政学の特色

以上のように，戦前のわが国における地政学の展開について簡単に見てきたが，この時期のわが国における地政学がドイツのGeopolitikの強い影響下に展開したことは明らかである。逆に，英語圏諸国の地政学に関して全くといってよいほど触れられていない点が疑問点として生じる。ハウスホーファーの地政学がマッキンダーの影響を強く受けていたことは明らかであるが[11]，本章で検討した文献を読んだ限りではそうした記載はない。したがって，それはいったい何故であろうかという疑問が生じる。後述するように，英語圏のgeopoliticsにおいては，その始祖としてイギリスのマッキンダーやアメリカのマハンが挙げられるのが一般的となっている。とはいえ，geopoliticsなる用語もまたGeopolitikの英訳語であるとすれば，geopoliticsは少なくともGeopolitik成立以前に

は存在しなかったはずである。とすれば，英語圏諸国においても新しい学であったはずのgeopoliticsが，どのように体系づけられたのか。そうした体系化において地理学者はどのように関わったのかという疑問も生じる。当然ながらマッキンダーがgeopoliticsなる言葉を一度も使わなかったのに，何故彼が英語圏諸国におけるgeopoliticsの創始者として位置づけられるようになったのか。おそらくハウスホーファーによって評価されたマッキンダーやマハンの著作が英語圏諸国に逆輸入され，その後の英語圏諸国におけるgeopoliticsの形成過程でgeopoliticsの創始者として位置づけられていったのであろう。マッキンダーの場合は，第二次世界大戦後の東西対立という国際関係が，その評価をさらに大きくすることになった（テイラー　1991, pp.69-70)。

わが国の地理学界でも，地政学と政治地理学の概念的検討を行った椙村（1968）は，Kristof（1960）を引用してアメリカ地政学の変遷を辿る際に，マッキンダーやマハンに言及している。戦後のわが国に於いては，あらゆる学問分野において，戦前のドイツに替わって，アメリカ色がきわめて強くなってくる。こうした過程を経て，曽村（1984）が述べるような，むしろマッキンダーやマハンを創始者として重要視する地政学のイメージが形成されていったのではないだろうか。外交史を専門とする曽村の描く地政学が，1980年頃から刊行が相次いだわが国の地政学関係の書物で語られる地政学のイメージを最もよくまとめているように筆者には思われる。これに対して，わが国地理学界における地政学のイメージは，Geopolitikの亜流としての戦前の地政学のイメージが未だに強い。とはいうもののそれは，わが国の帝国主義政策高揚にとって都合のよい部分のみをハウスホーファーの地政学から取り入れたとの感が強い。ハウスホーファー地政学の翻訳書は，1940年以降相次いで出版されるが，『太平洋地政学』(1942）や『大日本』(1942）など日本に関連したものが多いのである。このように見てくると，1920年代にわが国地理学界に導入された地政学の展開と，雑誌『地政学』にまさに象徴される，1940年前後から展開させられた地政学との間には概念的にも方法論的にも大きな相違が存在するようであり，つまり，前者は竹内（1974）が述べるように「正当な批判」がなされたのに対し，後者は戦争遂行のために体制側によって意図的に作られ，それに地理学者たちが迎合したないしはさせられたという性格をもつのである。

さらに，上述したように，戦前のわが国における地理学者たちは，地政学は政治学であり，政治地理学は地理学であるとして，両者を区別しようとした。先に述べた飯本の見解からすれば，地政学とは政治学と地理学と歴史学との境界領域ということになろうが，一方で地政学の実践が強く主張されながら，他方で地政学は地理学ではなく，政治学の分野であるとする意見も強かったのである。しかしながら，ここで一つの疑問が生じる。「地政学が政治学の一分野として位置づけられるとすれば，わが国の政治学者たちが何故地政学の推進にほとんど関わらず，地理学者たちが関与したのか」と。1941年の日本地政学会の創設メンバーの顔ぶれを見ても，一部の外交史を専門とする人々を除いて政治学者は加わっていない。当時の政治学界において国際政治や外交に関する研究がそれほどさかんではなかったにしても，新カント派の影響を強く受け，ドイツ国家学の影響がきわめて強かったわが国の政治学界で（堀江　1982, pp.8-9)，地政学がそれほど注目されなかったのは何故であろうか。あるいは，政治学界内では地政学は地理学だと意識されていたのかもしれない。とすれば，両学問からそれぞれの学問体系内のものとして認知されなかった理由はいったい何なのだろうか。こうした疑問にも答えていく必要があろう。

4. 最近の英米諸国における地政学geopolitics

冒頭で述べたように，英語圏諸国においては近年geopoliticsという用語がきわめてポピュラーなものとなっている。これについては，拙稿（1991）においてすでに指摘したように，テイラー（1991）がこうした動向を地政学の復活と呼び[12]，そうした地政学の流行について三つの起源を述べている（テイラー 1991, pp.57-58)。それらは，①ヘンリー・キッシンジャーHenry Kissingerがたびたびこの語を用いたというもの，②地理学者による過去の遺産評価が行われるようになってきたこと，及び③1970年代後半から80年代前半にかけて国際的に緊張が高まり，軍事びいき筋の新保守主義者たちが好んでこの語を用いるようになったこと，というものである。

竹内（1987）によれば，キッシンジャーは「この用語（地政学geopolitics－筆者）を換骨脱胎して……，理想主義的な自由主義政策と，反共イデオロギーの保守主義政策の双方に対置されるRealpolitikの意味で流行させたのである」という。テイラー（1991）もこうした意味で地政学を用いている。テイラー（1991）は地政学を「国際関係に関する現実的な伝統の一部」とみなし，世界システム論的アプローチから，世界システムにおける主要大国の対立に関わるものとして把握する。

世界システム論では世界を一つのシステムとみなし，このシステム内における諸国の盛衰を論じるわけだから，各国はシステムを構成する要素とみなされ，あたかも世界システムという一つの舞台で繰り広げられるアクターのごとく振る舞い，その地理的条件と関連づけられて説明される場合，擬人的な描写に陥りやすくなる。といって，こうした説明をかつての国家有機体説と同一視することは早計にすぎるであろう。

それはともかくとして，世界システム論的アプローチにおいてgeopoliticsなる用語が頻繁に登場するのは，以上の点から理解できる。地理学以外の書物においてこうした傾向が著しいのは，ウォーラーステインによる『ポスト・アメリカ』であろう。彼自身の1980年代の著作を集めたこの書では，全体が地政学geopoliticsと地政文化geoculture[13]とに大別されている。こうした書物において認められるgeopoliticsの特色は，自国中心的な性格が強調されないという点である。つまり，システム全体の中の要素として各国が把握されるため，個々の国のgeopoliticsは相対化されてしまうのである。こうした相対化された点に新しい地政学の性格を認めることができる。

テイラーが体系づけようとするのは，まさにこうした相対化された地政学である。それは，地政学的世界秩序，地政学的移行，さらには地政学的コードといった概念で示される。どんな国もその対外政策において一定の方針を持つ，これが地政学的コードである（テイラー 1991, p.77)。こうした各国の地政学的コードすべてに影響を与える，地政学的コード，すなわち覇権国を軸として形成される，システム全体を規定するようなものが地政学的世界秩序である（テイラー 1991, p.78)。そして，ある地政学的秩序から別のそれへの変化が地政学的移行である。テイラーに従えば，現在は，冷戦の地政学的秩序からの移行の時期ということになる。

このように，英語圏の政治地理学においては，地政学geopoliticsが国際政治の現実的な側面を述べるものとして位置づけられ，自国中心的な地政学が相対化されるのである。こうして，英語圏の政治地理学においては，geopoliticsは地理学における国際関係論として意味づけられることになる。しかしながら，チェレーンが用いたGeopolitikは本来国際関係に対する用語ではなく，むしろ国家の位置・形状・大きさなど，今日的に国際関係論とでも呼べそうな内容については，むしろ特

殊地政学として区別されているのである（チェレーン 1936, pp.107-114）[14]。ここに，チェレーンによって始められた地政学の本来の意味がハウスホーファーを経由して変化し，マッキンダーらの評価を高めて英米諸国に逆輸入され，geopoliticsとして洗練されてきた道のりを推測することができる。こうした英語圏における地政学geopoliticsの発達過程を明らかにすることも今後の課題となってくる。

また，ドイツのGeopolitikの見直しについては，Paterson（1987），Bassin（1987），Heske（1987）などの文献があり，これまでのドイツ地政学とりわけハウスホーファーに対するイメージが誇張されたものであった，とするなど，これまでの通説の再検討がなされつつある。ハウスホーファーは，わが国においては，逆の意味で誇張されているように思われ，日本側からのドイツ地政学の再検討も必要であろう。

5. おわりに

以上，かなり恣意的ではあるが，わが国における戦前の地政学と最近の英語圏諸国の地政学geopoliticsとの相違点について検討してきたものの，短い作業では得られたものも少ない。戦前のわが国において展開された地政学は戦時色が強まるにつれて，ハウスホーファー的な色彩が強くなってくる。とはいえ，それはgeopolitikをそのまま移植したものでは必ずしもなく，恣意的に移植された側面も見られるような気がする。わが国の地政学はハウスホーファーの受け売りというこれまでの固定的理解の仕方を，当時の状況に即しつつ再検討する必要があるという感が強い。また，ハウスホーファーのgeopolitikが英語圏でどのように展開し今日のような定説が形成されてきたのかも興味深いテーマだと思われる。

本稿では地政学概念の整理を行うことに主眼を置いたために，政治地理学と地政学との相違点について深く検討することができなかった。政治地理学と地政学との関係については，前者がアカデミックな学問であるのに対して後者は疑似学問であるといった区別，あるいは両者に区別など存在しないという，二つの見解に大別されるように思われる。わが国の場合，地政学に関わった地理学者が同時に政治地理学者でもあったのであり，そうした人物がただ責任逃れのためにあるいは臭い物に蓋をしてしまうという意味で，こういった区別を口にすること自体滑稽に思われる。それはともかくとして，近年新たな展開を示しつつある英米の政治地理学者とわが国の地理学者との間では，geopoliticsの内容に関して大きなズレが生じているように思われる。こうしたズレを解消しようとする努力が必要なのは言うまでもないが，その過程において政治地理学のこれまでの展開をきちんと把握しようとすると，地政学と政治地理学との関係をきちんとすることが急務となってくる。これについての詳細な検討は稿を改めたい。

本稿ではふれられなかったが，フランスでは英語圏とはまた異なった意味でgeopolitiqueという言葉が用いられている[15]。そこではほとんど政治地理学と同じ意味，むしろ古い政治地理学に対する新しい政治地理学という意味で地政学という用語が用いられているように思われる。竹内（1980，1987）も指摘するように，対抗ゲオポリティクとしての性格をもっているのである。このような地政学の使い方を眼にすると，英語圏諸国で用いられている国際関係の現実政治を述べる分野という定義づけはまったく当をえないものとなってしまう。他方，上述したようにドイツにおい

ても戦前の地政学の再考が進行しつつある。こうしたフランスの地政学，さらには現在のドイツにおける地政学の意味についても吟味する必要があろう。

付記

本稿で用いた文献のうち戦前の書物は，1992年5月8日に他界された，名古屋大学名誉教授松井武敏先生から頂戴したものである。先生のご好意に深く感謝するとともに，慎んでご冥福をお祈りいたします。

注

1）佐藤（1989, pp.14-30）は，対外政策の主な要因として地理的条件，国家の規模，国民性とイデオロギー，の三つを指摘している。なお，氏はgeopoliticsを地勢学と呼んでいる。

2）テイラー（1991, p.75）において，地政学的基礎の時代による変化と地政学の国民的偏りを指摘している。後述するようにこうした偏り，すなわち「ある国の対外政策の根底にある一連の政治的・地理的仮定」を，彼は地政学的コードgeopolitical codeと呼んでいる。

3）この点に関して，竹内啓一氏は地政学を学問とは認めず，わが国の地政学に対して一貫してゲオポリティクという用語を充てておられる。

4）竹内（1974）では，戦前のわが国においては，いわゆる地政学が「地政学」，「地政治学」，「日本地政学」などとさまざまに称されているが，いずれもドイツのGeopolitikの訳語であることから，「地政学」ではなく「ゲオポリティク」が用いられている。また，竹内（1987）でも，地政学の「学」たる存在を疑問視し，やはりゲオポリティクが用いられている。

一方，福嶋（1991）では，「地政学」が用いられているが，この場合，geopoliticsではなくGeopolitikの訳語として用いられている。

5）筆者は，後者を雑誌「地政学」に積極的に関わったグループと拡大解釈すると，後者はさらに，竹内（1974）に述べられている経済地理学者を中心としたグループと政治地理学者を中心としたグループとに分けることができるように思われる。このように単純に主たる専攻分野から区分するとすれば，前者は歴史地理学者のグループということになる。しかしながら，そうした区分の妥当性については今後の検討課題とし，本稿では扱わない。

6）戦前の文章を引用する場合，旧漢字及び旧仮名使いは現在のものに改めている。

7）これに先だって飯本は1925年の論文で，Geopolitikの訳語に「地政学」を充てている。竹内（1974）によれば，Geopolitikがわが国で最初に紹介されたのは，藤沢親雄による「国際法外交雑誌」の論文（1925）であり，わが国においてGeopolitikが紹介され，それが地政学と訳されたのは1925年が最初だということになる。

8）この論文ではKjellenはこのように訳されている。

9）飯本はLandschaftをこう訳している。

10）曽村（1984, pp.121-134）では，大東亜共栄圏構想に影響を与えた要因として，ハウスホーファーの地政学，日本古来からのいわゆる「アジア主義」，及びマルクス主義，の三つが指摘され

ている。また，平凡社の大百科事典の大東亜共栄圏の項目を見ると，生存圏Lebensraum概念が大東亜共栄圏に影響したとの記述がある。

11）たとえば，ハウスホーファー（1941）では，マッキンダーがたびたび参照され，「含蓄ある労作」の一つとしてマッキンダーの「歴史の地理学的中心点」（原書はMackinder, H. J.(1904)）があげられている。また，曽村（1984, p.93）も，ハウスホーファーの地政学に影響を与えたものとして，ラッツェルの政治地理学，マッキンダーのシーパワー論及び日本の大陸政策の具体的展開，の三つが考えられると述べている。

12）同書は第2版の翻訳である。1985年に出版された初版本では，第2章のタイトルは「地政学の再検討」となっていたが，第2版では「地政学の復活」となった。

13）ウォーラーステインは，geocultureを，「世界経済の内面で，可視的でないことが多いために，評価がより困難であるが，かといってそれを欠けば全体の成長がおぼつかないという，そうした（世界経済の一筆者）部分」（p.36）とみなしている。

14）同書は金生喜造訳によって『領土・民族・国家』として三省堂から出版されている。

15）フランスの地理学雑誌Hérodoteのアンソロジーであるの Girot and Kofman（1987）では，既存の政治地理学に替わるものという意味でgeopolitiqueが使われている。この点については，Takeuchi（1980）及び竹内（1987）に詳しい。

文献

飯本信之（1928）：所謂地政学の概念，地理学評論，4，76-99。

飯本信之（1929）：『政治地理學』，改造社，444p。

岩田孝三（1981）：地政学，日本地誌研究所編『地理学辞典－増補版－』，二宮書店，483。

ウォーラーステイン，I.，丸山　勝訳（1991）：『ポスト・アメリカー世界システムにおける地政学と地政文化－』，藤原書店，385p。Wallerstein, I. (1991): *Geopolitics and geoculture－essays on the changing world-system－*, Cambridge University Press, Cambridge, U. K. 242p.

小牧實繁（1940）：『日本地政學宣言』，弘文堂書房，211p。

佐藤英夫（1989）：『対外政策』，東京大学出版会，14-30。

椙村大彬（1968）：政治地理学・地政学の概念と，地理学と政治科学の交界，政治地理，3, 1-48。

関　寛治（1988）：地政学，『世界大百科事典　18』，平凡社，54。

曽村保信（1984）：『地政学入門－外交戦略の政治学－』，中央公論社，219p。

高木彰彦（1991）：世界システム論と政治地理学の新たな展開，地理学評論，64A, 839-858。

チェレーン，阿部市五郎訳（1936）：『生活形態としての国家』，叢文閣，300p。

チェレーン，金生喜造（1942）：『領土・民族・国家』，三省堂，292p。

テイラー，P.J.，高木彰彦訳（1991）：『世界システムの政治地理（上）』，大明堂，57-125。Taylor, P. J. : *Political geography－world-economy,nation-state and locality－*, 2nd ed., Longman, London, 42-90.

ハウスホーファー，土方定一・坂本徳松訳（1941）：『地政治學入門』，育成社，143p。

ハウスホーファー，太平洋協会訳（1942 a）：『太平洋地政學』，岩波書店，589p。
ハウスホーファー，若井林一訳（1942 b）：『大日本』，洛陽書院，417p。
半田輝雄（1970）：地政学，『大百科事典　ジャポニカ12』，小学館，59。
福島依子（1991）：地理学の方法論的反省と地政学，お茶の水地理，32，1-8。
藤岡謙二郎編（1979）：地政学，藤岡謙二郎編『最新地理学辞典』，大明堂，321。
藤沢親雄（1925）：ルドルフ，チェレーンの国家に関する学説，国際法外交雑誌24，155-175。
堀江　湛（1982）：現代政治学の性格とアプローチ，堀江　湛，岡沢憲芙編『現代政治学』，法学書院，1-38。
水岡不二雄（1974）：現代地理学における「地政学」の復活，経済，119，175-196。
Bassin, M. (1987) : Race contra space : the conflict between German *Geopolitik* and National Socialism, *Political Geography Quarterly*, 6, 115-134.
Blacksell, M. (1981) : gepolitics, Johnston, R. J. ed. : *The dictionary of human geography*, Basil Blackwell, Oxford, U.K. 137-138.
Girot, P. and Kofman. E. eds. (1987) : *International Geopolitical Analysis*, Croom Helm. Beckenham, U.K., 240p.
Goodall, B. ed. (1987) : geopolitics, Goodall, B. ed. : *The facts on file dictionary of human geography*, Facts on file, New York, 190-191.
Hepple, L.W. (1986) : The revival of geopolitics, *Political Geography Quarterly*, 5, S21-S36.
Heske. H. (1987) : Karl Haushofer : his role in German geopolitics and Nazi politics, *Political Geography Quarterly*, 6, 135-144.
Kristof, L., D. (1960) : The origin and evolution of geopolitics, *The Journal of Conflict Resolution*, 4, (未見).
Larkin, R. P. and Peters, G. L. eds. (1983) : geopolitics, Larkin, R. P. and Peters, G. L. eds. : *Dictionary of concepts in human geography*, Greenwood Press, Westport, 106-109.
Mackinder, H. J. (1904) : The geographical pivot of history, *Geographical Journal*, 23, 421-42. マッキンダー，曽村保信訳：地理学からみた歴史の回転軸，マッキンダー著，曽村保信訳（1985）：『民主主義の理想と現実』，原書房，251-284。
Paterson, J.H. (1987) : German geopolitics reassessed, *Political Geography Quarterly*, 6, 107-115.
Small, J. and Witherick, M.(eds.)(1986) : geopolitics, Small, J. and Witherick, M.(eds.) : *A modern dictionary of geography*, 2nd ed., Edward Arnold, London, 94.
Smith, G. E. (1986) : geopolitics, Johnston, R. J. ed. : *The dictionary of human geography*, 2nd ed., Basil Blackwell, Oxford, U.K. 178-180.
Takeuchi, K. (1980) : Geopolitics and geography in Japan Reexamined, *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 12.